

彼女は、BをVのように発音する癖があった。バスを、ヴァスと呼ぶように。それは彼女の生得的なものであるのか意図的なものであるのかは分からないが、それが世界から彼女を切り離し、彼女を個別具体になっている所以だった。

初めて彼女の(彼女からすれば)を聞いたのは丁度、今日みたいな初夏だった。

大学の講義で音声学の授業を受けた。確かやけに強い冷房が効いていたように思う。僕も彼女も半袖に一枚羽織っていた。教師は黒板に「」「」「」と書いた。続けざまに唇を閉じる音と、擦れる音の違いについて説明していた。擦過音だとかなんと言ったが、詳しく何を話していたかまでは分からない。楽だからという噂で受けた授業だったから、さほど興味もなかった。

「じゃ、隣と発声の練習をしてみましようか」

眠たげな学生たちを咎めるように、先生は指示を出した。友達もいなかった僕の隣に座っていたのが、例の彼女というわけだ。

「じゃあ、やってみようか」

彼女がそう言った。少しだけ気の抜けた声だった。やる気があるわけでも、ないわけでもない。

「ヴィー、ヴァス」

彼女は下唇を少し出た歯で噛んで、間違いないくの発音をした。

「ヴィ、ヴァイオリン」

先ほどよりも、少し歯が見えた気がした。その一瞬見えた歯が暗い教室で唯一の光源のようだった。

「どうぞ」

彼女が言った。

「何を、？」

口元に見とれていていた僕は、発言の意図を理解することが出来なかった。

「あなたの番」

顔に体温全部が集まったみたいに熱くなった。

「ビー、バス、ヴィ、ヴァイオリン」

一息で言い切る。教室内はまだざわめいている。

先生はそれを咎めない。

「ねえ、ビーをもう一回言ってもらえない？」

「ヴィー」

彼女はもう一度、同じ音を繰り返した。それがおそらく彼女にとつてのである。

「少し、違うかもしれない」

「そう？ 私、耳が悪いのかな」

ヴィー、ヴィーと口の中で発音するさまが、リス

が頬袋に食べ物隠すようだった。彼女の彼女らしさがその口内に詰め込まれた気がした。手を突っ込んで声帯を取れば、彼女のことが少しは分かるのかもしれない。

「あなたと私、何が違うかな」

「え、あ、僕は男で、君は女性」

彼女はフツと笑った。

「発音の話なんだけど」

俯いてごめんと言うしかなかった。発音について聞いてるに決まってるだろ、音声学の授業なんだから。何を言ってるんだらう。最悪だ。

「ごめん。多分、君はBの発音で、下唇を、噛んでる気がする」

彼女は何度か頷いた。そして何度かgの音を出した。gと混ざってはいしたが、確かにgに近づいている気がする。僕はそれがなんとなく、悔しかった。僕は彼女が彼女のままでいてほしいのに。

「分かった気がする、ありがとう」

「いえ、あ、名前を聞いてもいい？」

「青山です、学部は教育の英語専攻」

なるほど、gの発音が苦手なのは、彼女が帰国子女だからかもしれない。BがなくてVがある国はどこだろうか。

「君は？」

「相川拓海。工学部の情報学科」

「工学部？ 何で音声学の授業に出てるの？ 関係なくない？」

会話を円滑に進めるプロトコルのように笑い声を出した。

「楽単だつて聞いたから。自由履修の枠埋めに」

なるほどね。と彼女は笑った。

「確かに。英専でしか知られてないと思ってた」

「聞いたんだよ。こういうハックを見つけるのだけは上手い友達がいてさ」

青山は「へえ」と言つて、もう一度だけ口を動かした。

「ビー」

さっきよりも、少しだけ音が柔らかくなっていた。gに近づいている気がする。

「どう？」

「……近いと思う」

僕はそう言ってから、少しだけ迷った。

「でもそのままでも、いいと思う」

青山は一瞬だけ止まった。

「そのまま？」

「うん。分かるし」

自分でもうまく説明できなかった。ただ、直ってしまったら困る気がした。何が困るのかは分からな

い。青山は手を顎に当てた。

「ちよつと困るな。Babyすら正しく発音できない英語教師は嘘でしょ」

彼女のベイビーには若干、／＼が混ざっている気がした。青山はもう一度だけ「グイー」と発音した。今度は直そうとしていない音だった。

もう少し話をしてみたくて我が意を考えあぐねる。

先生がパンツと手を叩いた。

空間が断絶された気がした。先生はまた板書を始める。

「それじゃあ、今の調音点を意識して、レジュメ四ページの単語リストを……」

先生の抑揚のない声が、再び教室の空気を均一に塗りつぶしていく。先ほどまで僕と彼女の間だけに流れていた、あの湿り気を帯びた密度は、一瞬にして四散した。

青山は、手元の教科書に視線を落とした。さっきまで僕に向けていた、あの歯が見える口元は、今はもう、ごく普通の、どこにでもある女子大学生の沈黙の形に戻っている。

僕は自分の教科書に目をやった。単語リストの中のvagueに目が留まった。『曖昧な、漠然とした』という意味があるらしい。青山はこれを異常なほど

うまく発音するのだろうか。

青山の／＼が、僕をどこか遠い場所へ連れて行ってくれる気がした。青山が英語教師になるのだとしたら、彼女に教わる子供たちは、皆一様に、唇を噛む癖を持ってしまうのだろうか。世界中の『Baby』が、彼女の息漏れを含んだ音に書き換えられていく光景を想像し、僕は少しだけ眩暈がした。

「……ねえ、相川君」

不意に、小声で名前を呼ばれた。顔を上げると、青山さんは前を向いたまま、唇を動かさずに言っ

た。「直さなくていいって、どういう意味？」

僕は言葉に詰まった。彼女の個性を守りたかった、なんて言えば、初対面の相手としては気が悪い。

「バグ、的な」

僕は、自分にとって一番馴染みのある言葉を選んだ。

「完璧なプログラムよりも、どこか一箇所、記述ミスがある方が人間味があるっていうか。青山さんのその音は、エラーじゃなくて、仕様なんだと思う」

青山さんは、今度は笑わなかった。ただ、じつと黒板を見つめたまま、自分の下唇を指先でなぞった。その指先が、僕にはひどく官能的なものに見える。

た。

「仕様ね」

授業終了のチャイムが鳴る。学生たちが一斉に荷物をまとめ始め、静寂は完全に死んだ。

青山さんは手際よくカバンを肩にかけると、立ち上がり際、僕の耳元に顔を寄せた。

「でも私、英語教師になるからさ。エラーはデヴァツグしなきゃいけないの」

彼女が去り際に残した言葉は、やはり「ヴイー」に近い吐息を含んでいた。

彼女が教室を出て行く後ろ姿を目で追う。彼女が歩くたびに、周囲の空気が少しずつ「ヴァ行」に侵食されていくような錯覚に陥る。

次の授業はプログラミング演習だった。プログラムは基本的に、ルールがはっきり決まっている。

「をを~~を~~なんてしようものなら、プログラム全体が止まってしまふ。

自然言語は極めて自由だ。だから青山は許されている。ビル街の中の公園みたいに。

その次の週の音声学も、執拗に冷房が効いていた。青山は、僕が空けておいた隣の席にさも当然の

ように座った。彼女からは微かに、雨に濡れた紫陽花のような、あるいは古い図書室のような、湿り気を帯びた香りがした。

授業中、彼女はノートを取るふりをして、僕のルーブリーフの端に「傘、二本持ってたりますか？」と書いた。あまり綺麗な字ではなかった。右上がりの川が流れるような字だ。僕は「持っている」と返した。続けざまに「天気予報を見ないのは大罪だ」と書いた。

僕の故郷は常に天気が悪かった。学校に弁当箱を忘れるより、傘を忘れる方が罪深かった。天気予報を確認しないというのは、歯磨きもせずに寝るのと同義だった。

彼女は僕の文字を見て、声を殺して笑った。その振動が、密着してはいないはずの僕の腕にまで伝わってくる。講義が終わると、外は強い雨だった。

「一本貸してくれない？」

青山が尋ねる。僕は傘立てから傘を取り出す。

「はい。僕は折り畳みがあるから」

紺色の傘は彼女には少し長めに見えた。

「私がこれ使っているの？」

「うん。僕は家が近いから」

「私もかなり近いけれど」

「君は女性だ」

僕がそう言い切ると、青山は少しむっとした。そのまま傘を開き、数歩外に出る。パタパタと小気味良く傘の上で雨粒が躍っていた。

「いつ返せヴァいいかな」

「来週で」

曇り空の中でも、彼女の口元で歯が光っていた。

「明日でもいいよ。私、暇だから」

「君の連絡先を知らない」

「それもそっか」

彼女の体軀にしては大きすぎる傘と共に、背を向けて去っていった。

次の週の授業が終わったあと、青山はすぐには立ち上がらなかった。周囲の学生たちがざわめきながら教室を出ていくのを、ただ眺めているようだった。それに合わせて僕も動かないでいた。次の授業のことはあまり考えなかった。

「ねえ」

青山は分かっていたかのように声をかけてきた。

「傘、返す」

「分かった」

二人で出口に向かった。傘立てには丁寧にまかれた僕の傘と、ずっと置きっぱなしの傘が何本かあった。

「Love」

青山が唐突の愛をささやいてきた。

「どうしたの」

喉が乾いた。青山は、ゆっくりと口を開いた。

「ラブ」

わずかに／＼が混ざる。しかしほとんど／＼の音に聞こえた。

「ヴァス」

今度は少しだけ／＼に寄っている。

「……どう？」

「もう少しだけ、唇を閉じた方がいいかも」

「ふーん」

「英語なら、うまく言えるんじゃない？ ラブもベイベーも綺麗な発音に聞こえたよ」

彼女は確かめるように何度か頷いた。

「それも考えたけれど、それは適切な日本語を話せていないということでしょう？ それは教師になる人としてどうかと思って」

青山は自分の未来についてとことん真剣だった。そういう躊躇いの無さがとても好ましいと思った。

「そこまで考えなくてもいいんじゃない？ 方言が強い先生だってたくさんいるんだから」

「それもそう」

青山は聖剣を抜くように傘を取り出した。

「一応乾かしたけど、何かあったら言って」

傘からは若干、嗅ぎ慣れない匂いがした。これが青山の家の匂いなのだろうか。

「言って、ても、僕は君の連絡先を知らない」

青山は少し驚いた顔をしていた。

「聞けばいいじゃん」

「聞いてもいいの？」

ハハ、と青山は笑った。それはまるで子供の馬鹿を見るような笑いだった。急に自分が恥ずかしくなった。青山から顔を逸らして、ポケットからスマホを取り出す。

「じゃ、コレ、僕のアカウントだから」

画面を見せると青山は何のためらいもなく、僕と連絡先を交換した。リストの上に『夏希』という文字と端の焦げた目玉焼きのアイコンが出た。

「じゃ、何かあれば」

それから数日、僕たちはなぜかメッセージのやり取りをした。それはプロトコルのようであり、どこかデバッグの延長線上にあった。

青山から届くメッセージは、時折、不自然な場所で改行されていた。彼女の指先が画面を叩くリズムすら、BとVの余韻を孕んでいるような気がして、僕は無機質な液晶画面を眺めては、指先で彼女の名

前をなぞった。

七月の終わり。湿度は飽和点に達し、大学のキャンパスは重たい熱気に包まれていた。その日の音声学の講義は休講だった。掲示板でそれを知った僕は、いつもより空いている学食の隅で、一人で昼食を摂っていた。

スマホが震える。青山からだった。

「今、暇？ ご飯食べたい」

僕は短く返した。

「どこいけばいい？」

僕は図書館の前で待ち合わせた。十五分後、彼女は現れた。

薄手のサマーニットが、湿気で微かに肌に張り付いている。彼女は僕の隣に座ると、ふう、と長い溜息をついた。その息が風に乗って飛んで行った気がした。

「どこ行く？ ここ、暑いね」

青山は手でパタパタと顔を仰ぎながら言った。首筋には薄く汗が滲んでいて、サマーニット越しに浮き上がる鎖骨のラインが、いつかの音声学の授業で見たあの歯のように、白く鋭利に光っていた。

「最近できた、例のファミレスは？」

青山は僕の目をじっと見た。

「相川君の家は？」

「か、まわないけど」

声が裏返るのを気力で抑える。

「いいの？ 相川君、女の子を部屋に呼ぶタイプじゃないと思ってた」

「それは君の想像上の僕でしょ」

青山は「それもそう」と、あの『ヴィー』に近い吐息を漏らして笑った。

僕の部屋は、大学から徒歩五分の古いアパートだった。六畳一間の空間には、本と自作のデスクトップPC、そして申し訳程度の生活用品が整然と並んでいる。

すぐに冷房を最強に設定した。室外機が唸りを上げ、数分もしないうちに、部屋の中はあの音声学の教室と同じ、不自然なほどの冷気に満たされた。

「……生き返る」

青山は床に座り込み、ベッドの端に背中を預けた。

「飲み物、何かある？」

「水か、インスタントのコーヒーしかない」

「じゃあ、コーヒー。熱いやつがいいな。冷房で冷えてきたから」

僕は狭いキッチンで湯を沸かした。

背後から、彼女が僕の部屋を観察している気配が伝わってくる。

「相川君の部屋、全然生活感がない」

「寝るだけだから」

「ふーん。つまらないの」

コーヒーを二つ淹れて、彼女の隣に座った。

カップから立ち上る湯気が、僕と彼女の間の距離を曖昧にする。青山はカップを両手で包み、一口飲むと、小さく「苦い」と言った。

「……ねえ、相川君」

青山がカップを床に置き、僕の顔を覗き込んだ。

「私、大学辞める」

彼女の目が、まっすぐに僕を射抜いた。僕はコーヒーを飲むのをやめ、カップを置いた。

狭い部屋、サーバーのようなものの駆動音、そして冷気。

「どうして」

「まあ、いろいろあって」

「先生になるってのは？」

「ね、どうするんだろうね」

青山はソナーを失った船のような顔をした。

「なんでそんな他人事なの」

「まだ、何も決めてないから。誰にも言っていない」

だよ、これ」

青山はそう言つて、僕のベッドのシーツを指先でなぞつた。その指先が、何かの回路を辿っているように見えた。

教育学部の英語専攻。将来を有望視されていたはずの彼女が、あんなに真剣に自分のエラーを修正しようとしていた彼女が、すべてを投げ出そうとしている。その非論理的な飛躍に、僕の思考は追いつけなかった。

「……親は？」

「あつちも私に興味ないし」

唐突に、僕は青山について何も知らないと思いつた。彼女が親と不仲なのを、今の今まで知らなかった。

「もったいないだろ。教職って大変って聞くぞ」

積み上げたコードを完成直前で全削除するのは、ただの無能か狂気だ。

青山はふふ、と口元だけで笑つた。

「相川君が言つたじゃん。仕様だって。エラーがある方が人間味があるって」

「それは発音の話で……人生のデバッグを放棄しろって意味じゃない」

「同じだよ。私にとつてはね」

彼女はそのまま、ゆっくりと僕の方へ倒れ込んで

きた。サマーニット越しに伝わる彼女の体温は、冷房の冷氣に抗うように熱い。

「完璧な英語教師としての私をインストールするのに、疲れちゃつたのかも。」

ねえ、相川君、君はどう」

彼女の顔が、すぐ近くにある。人工的な梅の香りと、少しのアルコールに匂いがした。僕に会う前に酒を飲んできたのかもしれない。

潤んだ瞳の奥には、虚無と、それから投げやりな情熱が混ざり合っていた。

僕は彼女の肩を掴んだ。突き放すべきか、抱き寄せるべきか。僕の中の条件分岐は、どちらのフラグも立てられずに膠着している。

「……後悔するぞ」

「後悔なんて、明日にはもう溶けてなくなつてるよ。こんな暑い日なんだから」

青山は僕の首筋に手を回し、引き寄せた。

彼女の唇が触れる直前、あの小さな、白い歯が見えた。

「あなたは、だいぶ、不器用ね」

彼女が囁いた。初めて彼女が正しくoを発音した。

悲しくなつて僕は思い切り彼女を押し倒した。愛しているわけではない。救いたいわけでもない。た

だ、目の前で崩壊しようとしているこの個別具体を、僕の腕の中に繋ぎ止めておきたかった。

冷房の唸り声だけが響く部屋で、僕たちは重なり合った。

青山は僕の背中に爪を立て、何度か声にならない声を出した。そのたびに、僕の整然とした部屋に、修正不可能なノイズが書き込まれていく。

窓からはいつの間にか強烈な西日が差していた。僕たちは、何者でもないまま、ただお互いの熱を奪い合った。

「……ばか」

しばらくして、青山が僕の腕の中で呟いた。

「メイク・ラブって言うんでしょ、こういうの」

青山は乾いた笑い声をあげた。僕らの間に愛なんてないのに、気障なことを言うものだ。

青山はこれからどこに属するのだろうか。どんな個性や具体性を帯びるのだろうか。どんな風に成熟して老いていくのだろうか。

まあ、どうでも良いことなのだけど。